

二松学舎大学附属図書館  
quarterly report

# 季報

No. 80

2011(平成23)年  
10月



『法界寺』

## 目次

- ◆ P2 『方丈記』に描かれる元暦の大地震 磯 水絵
- ◆ P3 放射能汚染 岩崎愛一
- ◆ P4 明治三陸地震津波と二松学舎 松尾政司
- ◆ P5 「被災者」としての美術品 小野真弓
- ◆ P6 図書ツールをもっと使ってみよう!
- ◆ P7 九段校舎 図書館だより
- ◆ P8 10月・11月開館日案内 / 柏校舎 図書館だより

## 『方丈記』に描かれる元暦の大地震

附属図書館長 磯 水絵  
文学部 教授

また、同じころかよ。おびたたく大地震ふる事侍き。そのまま、よのつねならず。山はくづれて、河を埋み、海は傾きて、陸地をひたせり。土裂けて、水涌き出で、巖割れて、谷にまろび入る。なぎさ漕ぐ船は波にただよひ、道行く馬は足の立ちどをまどはす。都のほとりには、在在所、堂舎塔廟、一つとして全からず。或はくづれ、或はたふれぬ。塵灰立ちのぼりて、盛りなる煙のごとし。地の動き、家のやぶる音、雷にことならず。家の内にをれば、たちまちにひしげなんとす。走り出づれば、地割れ裂く。羽なければ、空をも飛ぶべからず。竜ならばや、雲にも乗らん。恐れの中に恐るべかりけるは、ただ地震なりけりとこそ覚え侍りしか。(角川文庫)

上に掲げたのは、鴨長明の『方丈記』に見える元暦2(1185)年7月9日の大地震の描写である。長明はこれを都の住みにくさを読者に語りかける、いわゆる五大災厄の最後に据えて、「四大種の中に、水・火・風はつねに害をなせど、大地にいたりては、ことなる変をなさず」と、また、「昔、齊衡のころとか、大地震ふりて、東大寺の仏の御首落ちなど、いみじき事ども侍りけれど、なほ、この度にはしかずとぞ」と評している。

前者に見える「四大種」は仏教語で、万物を構成する地・水・火・風の四元素を言い、『方丈記』に描かれる「世の不思議」、つまり五大災厄の四つまでは、大火事・辻風・大飢饉・大地震で、それぞれ、その火・風・水・地に拠るものである。因みに、災厄の残りの一つである遷都は平氏による人災で、それが災厄に組み込まれるのは、長明の時代に生きた都人にとって、いかに迷惑な事件であったかを示す。当時の文学作品はおおむね都人に向けて著されていた。

また、元暦の地震は相当に大きかったと推察されるが、長明が災厄を『方丈記』に叙述した意図は、都の危うさ、住みにくさを語るところにあり、それは、ひるがえって、自身が今住まいする日野の外山の方丈庵が、いかに安らげる勝地にあるかを浮彫りにするための目的で組み込まれた。したがって、五つの災厄の最後に据えられたそれは、自然災害のうちでも究極のものと考えられて、後者の一文に語られるところとなったのであろう。

長明は、大地は通常事件を起こさない。それが起きるの

はよほどの時で、「昔、齊衡2(855)年5月11日に地震があった時には、奈良東大寺の大仏の頭が落ちるなど、たいへんな事があったと申しますが、それでも今度の地震とは比べ物にならない規模であったとか」と著したのちに、だから、その地震の当時は、都人も煩惱を捨てて少しはましになるかと思えた。が、月日が重なり、何年も経つと、誰もあの地震のことを口に出すことさえしなくなったと嘆く。長明は、30代初めに経験したそれを昨日見てきたような臨場感をもって描写する自分だけは、その恐ろしさを忘れていないと言いたいのか。

先日、京都で出会ったタクシー運転手氏は、齊衡、元暦の地震のことを話すと、「知らなかった。京に都があったのは災害がなかったからだと思っていた」と洩らしていた。長明の言うとおりで。とにかく、私たちも長明のように、今年3月11日の東日本大震災を忘れてはならない。ただし、それで長明のように都を離れ、人生をアウトして隠者になるというのではなく、現在を反省し、教訓は教訓として、今は未来に向けて一步一步前進していかなければならない。私たちは神戸の復興のあとも、また知っている。



かもわけいがずら  
賀茂別雷神社(上賀茂神社)  
京都市北区上賀茂にある元官幣大社



## 放射能汚染

国際政治経済学部 教授 岩崎 愛一

福島原発の事故による多量の放射能汚染で、放射能に関する基礎知識を持たない多くの人たちやマスコミに不安と混乱が生じました。そこで、放射能について知っておくと役に立つ情報をお伝えします。

### ①放射能とは？

新聞等で見聞きするヨウ素131、セシウム137等は放射性物質と呼ばれ、放射線を出す元素。この放射線は、われわれの体を構成している原子を壊し、遺伝子情報を壊し、ガン等を引き起こします。放射線を出す能力が放射能といわれるものです。

### ②原爆と原発事故

広島・長崎の原爆による放射能汚染の方が、今回の福島での汚染よりひどかったのではという素朴な疑問を持つ人もいるでしょう。ウランの核分裂で放射性物質と放射線、熱が生まれます。広島では、瞬間的に発生した熱で爆風が起き、同じく瞬間的に発生した放射線と合わせて甚大な被害が発生しました。福島では、じわりじわり発生した熱は電気として使われ、放射線はウランに吸収されました。原爆で瞬間的に発生した放射性物質の量は、実質1kgほどですが、福島原発では、その量は1トンほどあり、その中の100kgあるいは数100kgがガスあるいは塵として外部に漏れました。ですから汚染量は原発の方がけた違いに多いのです。そのため、放射能汚染は広い範囲に及びました。また、広島での被爆は主に、瞬間的に発生した放射線によるもの、そして、その放射線が新たに作り出した放射性物質からの2次放射線によるものです。瞬間的に生まれた福島と同じ放射性物質による被曝は、それに比べると大きなものではありませんでした。また、新たに作られた放射性物質はすぐに放射線を出きってしまい、放射能を失います。それゆえ、その後まもなく広島には人が住めるようになりました。このようにして広島では短い期間の被曝で多くの被爆者生まれました。その時の被曝量は、福島の事故によるそれをはるかに超えています。

### ③福島原発放射能漏れの影響

8月現在、福島原発からの空気中への放射能漏れは、問題ないレベルです。各地の放射線量が、原発事故以前と比べ数倍から数十倍高いのは、3月に起きた水素爆発（これは核爆発ではなく、理科の実験でやる水素の爆発的な燃焼）で、原発の一部の建物が吹き飛び、内部に溜まっていた放射性物質が外部に漏れ、それが土の上に付着しているからです。コンクリート、屋根上のは水で流れますので、すでに雨で流れたでしょう。ただ、土についたものはそれでは除けません。今後その土の放射能を如何に取り除くかが課題となります。

### ④外部被曝

ある地域の放射線量が、1時間あたり〇〇マイクロシーベルト

( $\mu\text{Sv}$ )であると報道されます。これは、1時間そこにいと浴びる放射線量が〇〇 $\mu\text{Sv}$ になるという意味です。平時では、多くの場所(建物外)で平均1時間あたり0.02~0.05 $\mu\text{Sv}$ の放射線量です。これに対して、柏では0.2~0.4 $\mu\text{Sv}$ 、福島では1~2 $\mu\text{Sv}$ です。福島の値は一見すると大変な数値のようですが、1年間にすると、2( $\mu\text{Sv}$ ) $\times$ 365(日) $\times$ 24(時)=17520 $\mu\text{Sv}$ ~18ミリシーベルト(mSv)になります。これは大目に見積もった数値です。部屋の外にいる時間は精々8時間ほどですから、多く見積もっても年間10mSv以下でしょう。

知られていることは、100mSvを浴びるとガンで死ぬ確率が1年あたり0.5%増えることです。つまり福島に30年暮らすと、300mSvの被曝をし、ガンで死ぬ確率が1年あたり1.5%高くなります。人は8歳を過ぎれば30%ほどの確率でガン死をむかえます。なお、この放射能の影響は、広島・長崎での被爆者から得られた数値で、短時間に被曝した時のもののようなものです。一方で、世界には平時でも放射線が強い地域があります。たとえば、ブラジルでは年間10mSvの地域がありますが、そこでのガンの発生率は他と変わらない事が知られています。ただ、今回の福島のように名目年間20mSvほどを数十年間被曝し続けた時の健康への影響は、データが少なくよく分かっていないというのが現実のようです。

### ⑤内部被曝

魚、牛の肉等の放射能汚染の程度をベクレルという単位で表します。放射線は1つ2つと数えられ、100ベクレルなら、1秒間に100個の放射線が出ています。現在ある放射線は、原発から漏れた主にセシウム137から出ています。そこで注意してほしいことは、平時でも、われわれは自然放射能と呼ばれている放射能汚染されているものを飲み、食べていることです。その結果、60kgの人で、常に約7000ベクレル以上の放射能に汚染されているのです。つまり、1秒間に7000個もの放射線が我々の身体から出ていて、多くは内部で吸収されています。これは、体にあるカリウムや炭素の中に含まれている微量なカリウム40や炭素14という放射性物質によるものです。地球上にいる限りこの放射能は避けようがありません。

誰もがこれ以上の放射能を口にするのは嫌ですが、たとえば1kgあたり、ホウレンソウ200ベクレル、干し昆布に至っては2000ベクレルもの自然放射能があるのです。ですから、毎日の食事で放射線被曝をしているのです。放射能汚染牛肉等の問題は、これらのことを知った上で考えてみてください。

このように考えると、放射能から身を守るには勉強が必要で「正當に怖がることは、なかなかむづかしい」(寺田虎彦)ですね。

## 明治三陸地震津波と二松學舎

国際政治経済学部 非常勤講師 松尾 政司

日本は地震国といわれる。毎年、体に感じる有感地震数は、合計約1000回。このうち、家屋・構築物・地盤などに損傷や変化を与えた地震を被害地震と称している。記録に残る最古の地震は、允恭天皇5年(416)7月14日大和の「地震る」(『日本書紀』)である。しかし、被害の記録が無い。記録に残る最古の被害地震は、推古天皇7年(599)4月27日の大和で、「地動りて舎屋悉に破たれぬ」(『日本書紀』)である。以来、平成13年(2001)までの1403年間の被害地震数は、849回。明治元年(1868)から平成13年までの134年間に507回の被害地震が発生していて、年平均は約3.8回である。日本では太平洋プレートの地震が多く、それと共に、津波による被害が発生する。今年3月11日の東北地方太平洋沖地震も三陸沖の太平洋プレートの崩落によるもので、マグニチュードは9.0、最大震度は7で、人的被害は死者・行方不明者が2万423人、負傷者5896人の大災害となった(気象庁「日本付近で発生した主な被害地震」8月11日現在)。人的被害の95%は津波が原因(宮城県警発表「死因の約95%は水死で、犠牲者のほとんどが津波にのみ込まれて死亡した」『毎日新聞』4月18日朝刊)。歴史上の記録に残る津波の総回数は、138回で、明治以降の134年間の回数は、86回で、年平均では0.64回となる。人的被害からみた最大の地震は、大正12年(1923)9月1日の関東大震災でマグニチュード7.9。死者9万9331人、行方不明4万3476人を出した。多くは火災による焼死であった。

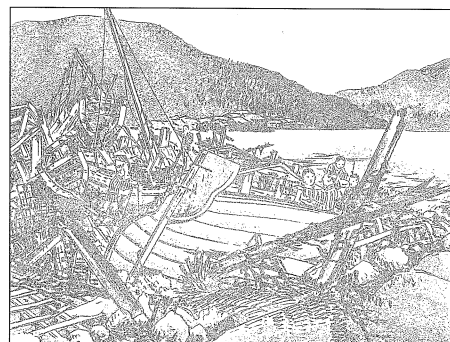
三陸を襲った津波で記録に残る最古の地震と津波は、貞観11年(869)5月26日のもので、マグニチュードは8.3±1/4。「陸奥国、地大に震動りて、流光昼の如く隠映。頃之人民叫呼び、伏して起つ能はず。…城郷(多賀城)倉庫、門櫓牆壁の頽落れ顛覆るものは其の数を知らず。海口は哮吼えて、声雷霆に似、驚涛涌潮り、沂湫き漲長りて忽ち城下に至り、海を去ること数十百里…原野も道路も忽て滄溟と為り…溺れ死ぬる者千許、資産も苗稼も殆と子遺無かりき」(武田祐吉他『訓読日本三代実録』)と壊滅状態であった。明治29年(1896)6月15日の明治三陸地震津波は、マグニチュードは8.1/4であったが、地震による人的被害は無かった。しかし、地震発生から30分後に襲来した津波によって、死者2万6360人の大被害をもたらした。この明治三

陸地震津波は、逸早く新聞でも報道された。救援活動も活発に行われた。義捐金の募集も「朝日新聞」は6月18日「三陸大海嘯遭難者義捐金募集」、「読売新聞」は19日の「社告海嘯被害者救恤義捐金募集」と呼びかけ多くの義捐金が寄せられた。津波発生から2ヵ月後の8月16日には、東京日日新聞など55社への義捐金総額が40万円以上に達している。

時に創立20周年を迎えようとしていた二松學舎でも早々に義捐金を募り、57人が応じて、日就社(「読売新聞」の発行所)を通じて宮城・岩手・青森の三県に義捐金10円を贈った。贈るに際して添えた趣意書(漢文)が明治29年7月28日の「読売新聞」三面二段に掲載されている。その一部を紹介すると次の通りである。「生等教へを中洲三島先生孔孟の道を講ずるに奉くること久しからずと為さず。今日の事豈に坐視するに忍びんや。独り一介の書生桑梓を離れ遠地に羈寓し、僅に衣食を父兄に仰ぐのみなるを憾む、何ぞ他人の急を救ふに暇あらんや。然れども有余の時を待ちて人を救はば、終に救ふ可きの時無し、是を以て相ひ誠めて紙筆の用を節し、数金の贏を獲、乃ち之を日就社に托して閣下に致す」と。義捐金を寄せた場合、「読売新聞紙上に其の金額姓名を公」表されているが、趣旨書が掲載されている事例は管見の限りない。故郷を離れ遠い東京の三島中洲先生の下で勉学に励む貧乏学生が、被害民救済のため勉学の道具である紙筆を節約して集めた行為に新聞社は共感して掲載したのであろうか。115年前の先輩諸氏の高い志を思うべし。

### 参考文献

宇佐見龍夫「最新版日本被害地震総覧」(東京大学出版会、2003年)  
付言:「読売新聞」掲載の漢文の読み下しは、松川健二先生にお教えを受けた。記して感謝いたします。



釜石海岸の惨状(『風俗画報』より)



## 「被災者」としての美術品

文学部 非常勤講師 小野真弓

地震には多くの損失が伴う。人や生き物の尊い命が多く失われるだけでなく、容赦なく物質を破壊する。その膨大なエネルギーによる力は突然、我々を襲い、何人もとどめることは不可能である。我が家でも東日本大震災で震度6弱の揺れがあり、熱帯魚の水槽が落下したり、食器類の破片が散乱したりで散々であったが、自然の猛威の前にはなすべがないことを実感させられた。

美術品にとっても同様である。どんなに美しく貴重な財産であっても、地震は相手を選ぶことなく破壊してしまう。被災者の被害状況は日夜繁く報道されたが、美術品もまた物言わぬ「被災者」なのであり、その被害もはかりしれないだろう。

今回の大地震による大津波で、北茨城の五浦海岸にあった、岡倉天心由来の六角堂が津波に流され、跡形も無くなってしまったのは衝撃的であった。私も学生時代に何度か訪れたことがあったが、日本の古美術の優れた価値を世界に知らしめた岡倉天心の遺品もこんなにあっけなく波にさらわれてしまうのかと、自然災害の恐ろしさと、相手を選ばない無慈悲な力をまざまざと再認識させられた。

一方、博物館にとっても受難の春であった。ある展覧会は会期の変更を余儀なくされ、なかには開催中止となるものまであった。展覧会開催に際しては、しばしば貴重なコレクションを借用することがある。不穏な環境のなか、二つとない美術品を展示することは躊躇されることである。福島原発事故により、海外のコレクターから貸出拒否をされたという先代未聞の事態も起こった。学芸員の方々は展覧会直前の予定変更を迫られ、迅速の対応に追われるなど、さぞや大変なことだったであろう。

震災といえば記憶に新しいのは、1995年に起きた阪神淡路大震災である。このときも、多くの博物館で貴重なコレクションが被災した。まだ日本の博物館の業界で、免震にたいする意識が今日ほど普及していなかった頃である。その震災による被害報告書を目にしたことがあるが、博物館そのものの建物から収蔵資料に至るまで、その被災状況は悲惨なものであった。

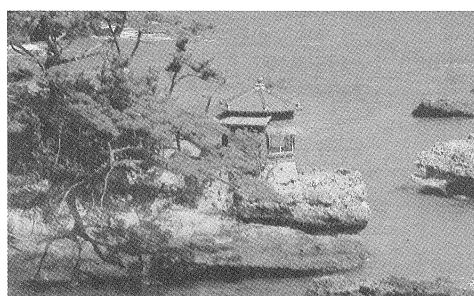
そして、この大事件を契機として、博物館の間では地震対策についての関心が急速に高まった。その1つの例が免震

装置の導入である。免震装置とは建物自体を免震するものから、30cm四方の小型の免震装置に至るまで、さまざまである。前者のものは、東京国立博物館など、国立の大規模な博物館で採用されている。また、後者のものは、一見展示台と見間違ってしまうほどコンパクトなものである。さらに、展示ケース自体に免震装置を取り付けるものなどもある。貴重な資料を借用するときは、免震台に展示することを義務づけられることも多い。

私が以前に勤務していた、長野県諏訪市にあるサンリツ服部美術館でも、大地震に備えて免震装置を設置した。当館には国宝の本阿弥光悦作の「黒楽茶碗 銘 不二山」を収蔵しており、当作品専用の展示ケースに免震装置を取り入れたのである。資料は、むき出しになって展示されている時ほど危ないことはない。地震だけでなく、盗難などの人災においてもしかりである。が、何よりも前触れもなく襲ってきて、かつ破壊力の伴う大地震ほど恐ろしいものはないだろう。免震装置は日々改良されているが、未知の大地震にとっては「絶対安全」という保障はないことも忘れてはならない。

なお、今回の東日本大震災では多くのボランティアが活動していることが話題となった。これは美術の分野でも例外ではないようだ。先の阪神大震災以降、多くのボランティアが美術品の救出作業に携わってきた。今回の震災直後も、被災した文化財を救出するために有志の修復家の人材を求める報道も耳にしている。

人間の作りだした美術品の命も、大自然の猛威の前にははかないものなのかもしれない。しかし私たちは文化財を後世に伝える義務をもっており、どんなに微細な力であっても、それを守っていく地道な努力が日々必要とされているのである。



五浦海岸 「茨城県の歴史散歩」(山川出版社)より引用

## 図書ツールをもっと使ってみよう!

### 検索の手引き(国文編)

#### 1.一般語の場合

- ◎「日本国語大辞典」(小学館)  
「大漢和辞典」他
- 「和名類聚抄」・「色葉字類抄」・「類聚名義抄」・「日葡辞書」  
「古事類苑」・「日本古典文学大系」・「新日本古典文学大系」  
「日本歌学大系」(索引使用)  
◎「新編日本古典文学全集」他

#### 2.仏教語の場合

- 「望月仏教大辞典」・「仏教語大辞典」(中村元一東京書籍)・「織田仏教大辞典」(大蔵出版)  
「仏教大辞彙」(富山房)・「わが国民間信仰史の研究」(堀一郎一東京創元社)

#### 3.人名の場合

- 「日本人名大事典」(平凡社)・「姓氏家系大辞典」(角川書店)・「尊卑分脈」(新訂増補 国史大系一吉川弘文館)  
「公卿補任」(新訂増補 国史大系一吉川弘文館)「大日本史料」中の人物没年史料にもあたること。  
◎「群書類従」・「続群書類従」系図部 「群書解題」にもあたること。  
「日本佛家人名辞書」・「日本古代人名事典」・「大日本仏教全書」往生伝類  
「増補改訂 日本説話文学索引」(清文堂)・「日本人物文献目録」(平凡社)

#### 4.地名・場所・建造物

- 「大日本地名辞書」(吉田東伍一富山房)・◎「角川日本地名大辞典」(角川書店)・「日本歴史地名大系」(平凡社)  
「京都叢書」一原典にもあたること。・「拾芥抄」(故実叢書一明治図書)・「大内裏図考証」(故実叢書一明治図書)  
「大日本寺院総覧」・「神道大辞典」(平凡社)

#### 5.分野別辞典

- 「和歌文学大辞典」(明治書院)・「和歌大辞典」(明治書院)・「説話文学辞典」(東京堂)  
「日本歴史大辞典」(河出書房)・「日本文学大辞典」(新潮社)・◎「国史大辞典」(吉川弘文館)  
「日本近代文学大事典」(講談社)・「日本漢文学大事典」(明治書院)・「官職要解」(明治書院)

#### 6.和歌

- ◎「新編国歌大観」(角川書店)・◎「新編私家集大成」(明治書院)・「名歌辞典」(明治書院)  
「八代集抄」〈八代集全註〉(有精堂)3に勅撰作者部類  
「日本歌学大系」(風間書房)・「西本願寺本三十六人集精成」(風間書房)

#### 7.歴史資料

- 「日本史籍年表」・「六國史」索引一「六國史」  
「史料綜覧」・「大日本史料」一「史料大成」・「大日本古記録」・「国史大系」他

#### 8.書誌・目録

- 「国書総目録」・「国語学研究事典」・「群書解題」・「国語国文研究文献目録」・「国文学年鑑」・「本朝書籍目録考証」(明治書院)

#### 9.百科全書的なもの

- 「古事類苑」・「故実叢書」・「広文庫」  
◎印データベースで利用可

## 九段校舎 図書館だより

### ブックラウンジがオープンしました。

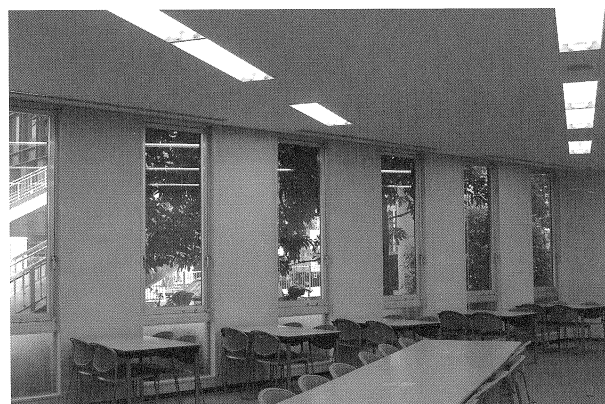
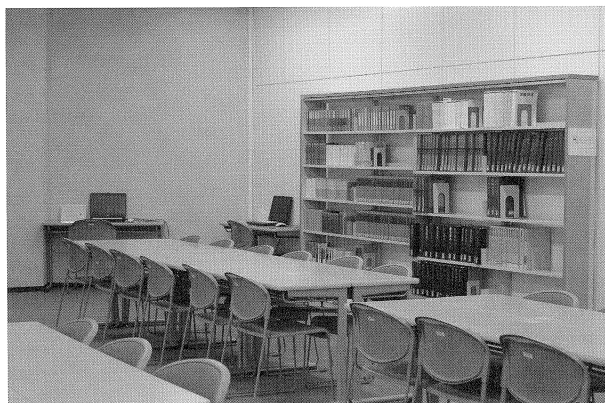
平成23年4月、二松学舎大学別館（九段1号館に隣接する日本生命三番町ビル1階）に別館図書閲覧室（通称：ブックラウンジ）がオープンしました。

入口には二松学舎大学別館ブックラウンジの看板が掲げられており、本学の学生であればどなたでも利用することができます。

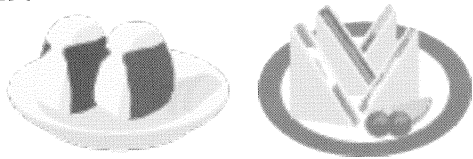

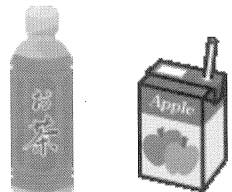

開室時間は、授業期間中の平日（月曜日～金曜日）の9時から16時20分までです。

最大の特徴は、飲み物を持ち込むことができ、飲みながら読書をしたり、グループ学習をすることができることです。なお、お昼の時間帯（11:30～13:00）には持ち込んだお弁当を食べることもできます。但し、飲食については下記の通り少しだけルールを設けさせていただいておりますので、皆さんの快適な利用のためにご協力ください。

閲覧室は、内堀通りに面した大きな窓から明るい光が差し込む開放的な空間となっており、122席の閲覧席が用意されています。その他には、インターネットに接続されているパソコン2台とコピー機も設置しておりますので、是非ご活用ください。



### 別館図書閲覧室飲食ルール

	飲食できるもの	飲食できないもの
食べ物	◎軽食  おにぎり・サンドウィッチ等	×汁のあるものや、おいがつよいもの  カップラーメン、カレー等 <small>※学食からの持ち込みはできません。汁は捨てることなく、強いにおいは他の方の迷惑になります。</small>
飲み物	◎アルコール以外 	×アルコール類 

※館内で飲食できるのは、別館図書閲覧室のみです。快適な環境づくりにご協力ください。



## 10月の開館日案内

九段		柏	
9:00～16:50	1 土	9:15～16:00	
閉館	2 日	閉館	
9:00～21:50	3 月	9:15～18:55	
9:00～21:50	4 火	9:15～18:55	
9:00～21:50	5 水	9:15～18:55	
9:00～21:50	6 木	9:15～18:55	
9:00～21:50	7 金	9:15～18:55	
9:00～16:50	8 土	9:15～16:00	
閉館	9 日	閉館	
閉館(体育の日)	10 月	閉館(体育の日)	
9:00～21:50	11 火	9:15～18:55	
9:00～21:50	12 水	9:15～18:55	
9:00～21:50	13 木	9:15～18:55	
9:00～21:50	14 金	9:15～18:55	
9:00～16:50	15 土	9:15～16:00	
閉館	16 日	閉館	
9:00～21:50	17 月	9:15～18:55	
9:00～21:50	18 火	9:15～18:55	
9:00～21:50	19 水	9:15～18:55	
9:00～21:50	20 木	9:15～18:55	
9:00～21:50	21 金	9:15～18:55	
9:00～16:50	22 土	9:15～16:00	
閉館	23 日	閉館	
9:00～21:50	24 月	9:15～18:55	
9:00～21:50	25 火	9:15～18:55	
9:00～21:50	26 水	9:15～18:55	
9:00～21:50	27 木	9:15～18:55	
9:00～21:50	28 金	9:15～18:55	
9:00～16:50	29 土	9:15～16:00	
閉館	30 日	閉館	
9:00～21:50	31 月	9:15～18:55	

●教育実習に際し、貸出延長を希望される方はカウンターへお申し出ください。  
※開館時間等が変更になる場合は、随時、HPや掲示等でお知らせします。

## 11月の開館日案内

九段		柏	
○ 9:00～21:50	1 火	9:15～18:55	○
☆ 閉館(学園祭)	2 水	9:15～16:00	☆
☆ 閉館(文化の日)	3 木	閉館(文化の日)	
☆ 閉館(学園祭)	4 金	9:15～16:00	☆
9:00～16:50	5 土	9:15～16:00	
閉館	6 日	閉館	
9:00～21:50	7 月	9:15～18:55	
9:00～21:50	8 火	9:15～18:55	
9:00～21:50	9 水	9:15～18:55	
9:00～21:50	10 木	9:15～18:55	
9:00～21:50	11 金	9:15～18:55	
◇ 閉館(推薦入試)	12 土	9:15～16:00	
閉館	13 日	閉館	
9:00～21:50	14 月	9:15～18:55	
9:00～21:50	15 火	9:15～18:55	
9:00～21:50	16 水	9:15～18:55	
9:00～21:50	17 木	9:15～18:55	
9:00～21:50	18 金	9:15～18:55	
9:00～16:50	19 土	9:15～16:00	
閉館	20 日	閉館	
9:00～21:50	21 月	9:15～18:55	
9:00～21:50	22 火	9:15～18:55	
閉館(勤労感謝の日)	23 水	閉館(勤労感謝の日)	
9:00～21:50	24 木	9:15～18:55	
9:00～21:50	25 金	9:15～18:55	
9:00～16:50	26 土	9:15～16:00	
閉館	27 日	閉館	
9:00～21:50	28 月	9:15～18:55	
9:00～21:50	29 火	9:15～18:55	
9:00～21:50	30 水	9:15～18:55	

○1日(火)から卒業論文・修士論文作成のための長期貸出を開始します。  
返却期限 学部4年生 12月10日(土) 博士前期2年生 1月21日(土)  
☆2日(水)～4日(金)は、学園祭のため、九段図書館は閉館、柏図書館は開館時間となります。  
◇12日(土)は、推薦入試に伴う学内立入禁止措置のため、九段図書館は閉館となります。  
※開館時間等が変更になる場合は、随時、HPや掲示等でお知らせします。

## 柏校舎 図書館だより

### 平成23年度柏市立図書館・市内大学図書館合同企画展・講演会

#### 《企画展》関東大震災と白樺派

関東大震災は文壇にも多大な影響を与えた。

1910年創刊された雑誌『白樺』は、大震災により廃刊となるまで14年間160冊を刊行した。今回は『白樺』を中心として活躍した作家、武者小路実篤・有島武郎・志賀直哉などの作品を紹介する。併せて『白樺』『新思潮』『種蒔く人』など大正・昭和初期の雑誌(複製版)も展示する。

期間:平成23年10月17日(月)～10月29日(土) ※日曜日は休館

場所:二松学舎大学附属図書館(柏) 3階 展示資料室

#### 《講演会》関東大震災と『白樺』－1923年の武者小路実篤・有島武郎・志賀直哉－

関東大震災によって廃刊となった『白樺』の同人たちに照明を当てる。震災のあった1923年、3月に志賀直哉は我孫子から京都へ移住し、6月に武者小路実篤は心中を遂げ、武者小路実篤は新しき村在住6年目であった。

かれらの動きの中に現在につながるものをさぐりたい。

講師:瀧田 浩(二松学舎大学 文学部准教授)

日時:平成23年10月29日(土) 13時30分～15時予定

場所:二松学舎大学柏校舎 1号館 2階 205教室

#### 表紙写真解説

#### 法界寺

京都市伏見区日野にある寺。日野薬師ともいう。永承6(1051)年、日野資業すけなりの創建。ここに長明の友人禅寂が住していた。なお、この寺より東へ700mの溪流端に方丈石があり、長明方丈庵が所在したとされている。

二松学舎大学附属図書館

季報  
第80号

発行日 平成23(2011)年10月1日

発行 二松学舎大学附属図書館

九段校舎図書館 〒102-8336 東京都千代田区三番町6-16

電話:03-3263-6364

柏校舎図書館 〒277-8585 千葉県柏市大井2590

電話:04-7191-8758

印刷所 株式会社 サンセイ

電話:03-5614-2515